

令和4年度 一般選抜 小論文 解答解説

テーマ:オバマ広島演説と道義的目覚め

問1:広島を訪れる理由(200字以内)

- **解答例 1(標準的構成):** それほど遠くない過去に解き放たれた、人類を滅ぼしかねない原子爆弾という恐ろしい力に思いをさせ、犠牲となったすべての人々を追悼するためである。また、悲劇の記憶を直視し、あの瞬間の子どもたちの恐怖を追体験することで道義的な想像力をかき立てるためである。私たちが何者であり、今後どのような存在になり得るかを自省し、惨禍を繰り返さないための共同責任を果たすべく、現状を変える決意を新たにするためである。
- **解答例 2(論理重視):** 人類を破滅に導く核兵器という力に思いをさせ、国籍を問わず全ての犠牲者を悼むためである。演説者は、歴史を直視し、凄惨な苦しみの再発を防ぐために「やり方」を変える共同責任が我々にあると説く。爆弾投下時の光景や恐怖を想像し、声なき叫びに耳を傾けることで、現状に甘んじる心と戦う道義的な想像力を養う必要がある。これらを通じて自己のあり方を問い直し、平和への選択を行うための契機とすることが訪問の目的である。
- **解答例 3(多角的視点):** 科学技術の進歩が殺戮マシーンを生んだという事実を直視し、核兵器という恐ろしい力によって奪われた無辜の命を追悼するためである。訪問を通じて、物質的進歩の陰で見失いがちな「暴力の正当化」という過ちを自省し、道義的な想像力を回復することが求められている。過去の凄惨な記憶を風化させず、破壊能力ではなく「何を築き上げるか」によって国家を定義し直すための、人類共通の変革を促す場として広島を捉えている。

問2:核兵器に関する条約や機構(200字以内)

- **解答例 1(核不拡散条約:NPT):** 核不拡散条約(NPT)は、核兵器を保有する国を米・ソ(現ロシア)・英・仏・中の5カ国に限定し、それ以外の国への拡散を防ぐことを目的とした条約である。非核保有国には核兵器の受領や製造を禁じる一方、核保有国には誠実に核軍縮交渉を行う義務を課している。また、原子力の平和利用を権利として認めており、国際原子力機関(IAEA)による査察を通じて、核物質が軍事転用されないよう監視する体制をとっている。
- **解答例 2(核兵器禁止条約:TPNW):** 核兵器禁止条約(TPNW)は、2017年に国連で採択され、2021年に発効した史上初めて核兵器を全面的に違法化した条約である。核兵器の開発、実験、製造、保有、使用だけでなく、使用すると威嚇も禁止している。従来のNPTが核保有国の立場を前提としていたのに対し、本条約は「核兵器の非人道性」を根拠に、核兵器の完全廃絶を目指している。被爆国である日本は署名していないが、国際的な廃絶への機運を高めている。

問3:「戦争そのものに対する考え方」の変容(600字以内)

- **解答例 1(標準:道義的想像力と協力の重視):** 私たちは「戦争そのものに対する考え方」を変えなければならない。なぜなら、科学技術が飛躍的に進歩した現代において、人類は自らを滅ぼし得る破壊能力を手にしており、従来の「支配や征服」という衝動に基づいた闘

争を続ければ、人類全体の破滅を招きかねないからだ。従来の考え方とは、国家の生存や権威を、他者を抑圧する「破壊能力」や「暴力の正当化」によって定義するものである。これに対し、私たちが変えるべき方向は、国家を「何を築き上げるか」という創造的価値によって定義し直すことである。演説者が説くように、相互依存の高まりを「競争の動機」とするのではなく、共通の利益のための「協力の土台」と捉え直す視点が必要だ。具体的な変容のためには、一人ひとりが「道義的想像力」を磨くことが不可欠である。私は学校での平和学習を通じて、被爆者の証言を聴き、その痛みを自分事として想像する努力をしてきた。この想像力こそが、現状に甘んじようとする心への楔となる。平和とは、単に武器を置くことではなく、自らの「正義」が殺人の許可証になっていないかを常に問い続ける「終わりのない自省」である。破壊の力に支配されるのではなく、他者の人間性を認め、共に何を築けるかを問い直す。この思考の転換を共同責任として引き受けることこそが、広島をの教訓を未来へ繋ぐ唯一の道であると私は考える。

- 解答例 2(論理重視:科学と倫理のズレの克服)
- 解答例 3(高度:高坂理論「価値の体系」の更新)

採点のポイント・解説

1. 問 1: 「恐ろしい力(核)」への言及、犠牲者への追悼、自己のあり方への自省、共同責任、という要素を本文から抽出できているか。
2. 問 2: 具体的な名称(NPT, TPNW など)を挙げ、その「制限・縮小・廃絶」に向けた仕組みを正確に記述できているか。
3. 問 3: 従来の考え方(支配・征服・暴力の正当化)と、新しい考え方(創造・協力・道義的想像力)の対比を明確にし、自身の体験と接続できているか。